

緒 言

職業訓練の適切な指導方法の検討が必要とされている今日、OHPなど視聴覚機器の活用法は重要な研究課題である。当大学校においては、これまで各種の訓練技法にかかわる指導員研修がおこなわれ、またこれからも継続するものと思われるが、視聴覚技法の研修を展開してゆくにあたって、教材の作成法とか機器の使用法などを、一つの資料としてまとめておくと、適正なカリキュラムを構築していくうえで有意義なものと思われる。

そこで、本研究では、筆者がこれまで行ってきた視聴覚研修の体験をもとに、いくつかの視聴覚メディアの活用法にかかわる資料を開発し、報告書としてここにとりまとめることとした。主な留意点は、次のとおりである。

- (1) 従前に開発したOHPの活用技術にかかわる資料⁽¹⁾をもとにして、その内容の再検討を行い、さらに具体化を図った。たとえば、TP（トランスペアレンシ）上での作図にかかわる用具の適切な使い方などにも言及した。
- (2) この資料を当該研修において用いるのみならず、指導員が訓練現場において、必要な視聴覚技法を抜きだして参照することができるよう、なるだけその活用方法をキーワードまたはキーセンテンスとして列挙することとした。ここでいうキーセンテンスは、指導員が視聴覚教材の開発などを行う際に、事前に個々の活用技法を想起させることを目的とするものである。その主旨から、各技法は極力簡素に表現することとした。これを参照することにより、訓練効果の高い教材の開発が期待される。
- (3) “視聴覚”を授業の計画あるいは立案との関係においてとらえ、明記した。これまで、“視聴覚”は、とかくハードウェアの活用そのものを指す傾向が、一つの側面として見られたように思われる。訓練効果の高い授業を狙うことが”視聴覚”の一義の目的と考えれば、先の関係の記述は一つの必要事項と思われるし、またその明確化が、開発教材が当該教科のどの部分でどのような展開の下に利用できるのかを、第三者にいわば客観的に納得させることにつながるであろう。そこで、本資料では、授業計画案についても若干言及している。
- (4) TPとスライドは、静止画という点において、教材開発におけるノウハウ上の共通性が高い。そこで、ここでは、主にこれら2つのメディアのノウハウをまとめている。
- (5) 上記(1)～(4)に基づいて、「活用技法」を日本語のほか英語でもあわせて作成

した。すなわち、今後、外国人に視聴覚指導を行ったり、海外への技術移転などに際して、視聴覚技法が利用されることは充分考えられる。

この資料は、筆者が昨秋国際協力事業団の下に、ザンビアで視聴覚セミナーを行ったのをきっかけとして、とりまとめることとなった。この作成に直接・間接に御協力いただいた多くの方々に感謝の意を表したい。

訓研調査研究資料 第91号

OHP等視聴覚メディアの活用技法
—指導員研修に向けて—

発行 1990年3月

発行者 職業訓練研修研究センター
所長 志賀 武彦
〒229 神奈川県相模原市相原1960
電話 0427-61-9911 (代)

印刷 (株) ワークワン
〒229 相模原市中央3-8-5
電話 0427-58-6091